

## [国 語]

## 説明文の論理性を自分の文章表現に生かす指導

- 論理的な文章を書くために、教材文で何を学ぶか -

尾矢 貞雄\*

## 1 はじめに

説明文の指導では、文章の内容や構成、要点を的確にとらえるための指導法について、多くの研究や実践がなされている。私もこれまで、確かな読解力を身に付けるために、教材文の中での文末表現の工夫や段落相互をつなぐ接続語の使い方に着目させたり、読み手に分かりやすく伝えるための説明文の論理性（ここでいう論理性とは、はじめ、なか、おわり等の構成で書かれる文章を指す）について指導したりしてきた。その結果、各テストにおける読解力を問う正答率は大きく伸び、一定の成果をあげることができた。

このように、これまでの説明文指導は、「文章を的確に読む力を身に付ける」という指導、つまり「読むために読む」ことに重点が置かれ指導されてきた。私は、この「読むために読む」指導を発展させ、総合的な学習との関連を図りながら、説明文における論理性を自分の文章表現に取り入れ、論理的に文章を書くことができるようになるという指導、言い換えれば「書くために読む」指導を考えた。

説明文の論理性を自分の文章表現に取り入れ、論理的な文章を書くことができるようになるには、説明文から何を学び、どのような学習過程を構成すればいいのかを、本研究を通して明らかにしたいと考えた。

## 2 研究の目的

本研究は、説明文の読解指導において、「書くために読む」という学習過程を構成することで、説明文に見られる文章の論理性を子どもが自分の表現に取り入れ、論理的な文章表現力を身に付けることができることを明らかにするために行う。

## 3 研究の方法

本研究の内容を、次の視点から明らかにしていく。

## (1) 総合的な学習の時間との関連を図り、「書くために読む」目的を子どもが確かにもつ

伝えたいことを文章として表現するには、何のために書くのかという目的意識と、誰に書くのかという相手意識を書き手が強くもたないと活動は充実しない。また、その目的意識や相手意識は、子どもたちの興味や関心、生活や活動に密接にかかわっている事象が望ましい。当学級では、総合的な学習の時間で「ラジオ番組」を作り放送する活動をしている。そこで、説明文を書く活動を、ラジオ放送の原稿作りと関連させることにした。子どもは、自然や生き物、文化などの不思議を説明文としてまとめ放送するラジオ番組「何でもトリビア」の放送原稿を書く。子どもは、自分が興味をもった本の内容をリスナーに分かりやすく論理的に再構成し、説明文として書きまとめるのである。「リスナーに分かりやすい放送原稿を書く」という目標を設定することが、子どもたちの書く意欲を大きくさせ、持続させることができると考える。

## (2) 教材文のよさを自分の表現に生かす意図をもって学ぶことで、必要な言語技術を身に付ける

自分の作る放送原稿をさらによりよくするために説明文のよさを学ぶという気持ちをもって、教材文の読解活動を進めていく。学習指導要領における中学年での指導事項や内容と照らし合わせ、本単元では、文章の全体構成の理解・段落相互の関係の理解・適切な接続語の用法の理解・適切な文末表現の用法の理解を図り、自分の文章表現に生かせるようにしていきたい。

---

\*長岡市立表町小学校

## (3) 教材文の読解で身に付けた言語技術を自分の文章表現に取り入れ、説明文を書く

教材文の読解を通して身に付けたい文章表現の具体的な力は、次の三点である。

- ① 論理的な文章を書く力
- ② 段落相互の関係を正確に把握し、適切な接続語を使って文章と文章をつなぐ力
- ③ 文末表現の工夫で考えを明確に伝える力

文章を論理的に書くことができるようにするために、文章の構成図を書く。段落相互の關係に適した接続語を選ぶことができるようにするために、構成図では段落相互を矢印で結び、各段落の關係が一目で分かるようにする。矢印でつなげることで、各段落の關係が順接なのか逆接なのか追加なのかがよく分かる。効果的な文末表現で文章を書くことができるようにするために、説明文の学びで得た文末表現の工夫（読者への問いかけ・意味を強める・伝聞や推定）と自分の文章表現とを照らし合わせ推敲することができる原稿用紙を活用する。この原稿用紙は、書いた文章に対して加除訂正を加えたり、接続語や文末表現の書き直しをしたりできるスペースを行間に設けている自作の原稿用紙である。書き直しや付け足しは赤ペンで行うこととする。さらに、自分の書いた文章の中に教材文読解で学んだ文章表現の工夫が生かされているかをチェックすることができる評価項目を設け、自己評価をできるようにする。

## 4 研究の実際

## (1) 活動計画（全22時間） 対象とする子ども 4年生 男子16名 女子18名（計34名）

次	○学習活動（時間）	☆支援や留意事項
1	○教材文「手で食べるはしで食べる」を通読し、感想をもつ (1) ○音読練習をする (2, 3)	☆一文読み、形式段落読み、速読み、グループ読みなど、読み方に変化を持たせながら、じっくりと音読ができるようにする。 ☆文章全体を一目で概観できるように作成し直した教材文を用意する。(A3サイズ)
	○形式段落ごとに小見出しを付ける (4)	☆小見出しを書きまとめるシートを用意する。(一枚で全体が概観できるようにする)
	○文章全体の構成を理解し、簡単な図で表す ○「アメンボは忍者か」の文章構成を図に書き表し、「手で食べるはしで食べる」の文章構成との違いを理解する (5, 6, 7)	☆段落のつながりや接続語の使われ方に着目させ、文章を大きく三つに分けることができるようにする。
	○文末表現の工夫を理解する (8, 9)	☆特徴的な文末表現にラインマーカーでチェックさせ、それぞれの表現の工夫について考えさせ理解を図る。
2	○市立図書館へ行き、調べたい本を決める (10, 11)	☆市立図書館を下調べしておき、どこにどのような本があるか把握しておく。
	○本をじっくりと読み、大体の文章構成を決める (12, 13, 14)	☆大まかな文章構成を考え、シートに書いて貼れるようにする。
	○各形式段落の中心となる文を書きまとめる (15, 16)	☆中心となる文を、シートに書けるようにする。
	○説明文として書きまとめ、文章を推敲する (17, 18, 19)	☆接続語や文末表現の仕方が適切であるかを確認できる評価カードを用意しておく。
	○説明文の発表会を行う (20)	☆一人一人の発表を評価するカードを用意しておく。 ☆グループ（1グループは5人）ごとに発表会を行い、評価カードに相手の発表についての評価をする。
	○ラジオ番組の収録を行う (21, 22)	☆ICレコーダを使って番組を収録し、web上にインターネットラジオ放送局を開設する。

## (2) ラジオ番組での放送を動機づけたことで、教材文を読む目的を強く意識した子ども

当学級は、総合的な学習の時間でラジオ番組作りに取り組んできている。これは、地域の人・もの・こととかかわり、地域を見つめ、考えたり感じたりしたことを音声による表現でリスナーに伝えることを目的として行っているものである。主に、校内放送や地域のラジオ放送局『FMながおか』で放送している。ラジオ番組は、テーマの設定→情報収集→放送原稿作成→収録（あるいは生放送）→放送というプロセスを経て作られる。この、放送原稿の作成の活動を国語科の文章表現活動と関連させたのである。

本単元の導入で、「ラジオ放送の放送原稿をさらに上手に書くことができるようになるために、教科書の説明文に書いてある文章表現のよさを学ぼう。」と子どもに提案した。これまでに6回の番組を放送してきていたので、子どもはよりよい番組作りを願い、教科書にある説明文のよさを自分の文章表現に生かし、リスナーに分かりやすいラジオ放送をしたいという意欲をもった。

このように、教材文を学ぶ目的をラジオ放送をよりよいものにするためという子ども自身の課題の中に見だし、そのための手段として教材文の読解に取り組むという動機づけをしたことで、子どもは、教材文のよさを自分の文章表現に生かすために読むという意欲を強くもったのである。

## (3) 教材文のよさを自分の表現に生かす意図をもって学んだことで、確かな読解力を身に付けた子ども

自分の放送原稿に教材文のよさを取り入れていこうとする意欲をもって学んだことで、その学びが受動的な学びから能動的な学びへと変化した。本単元での指導内容は、文章の全体構成の理解、段落相互の関係の理解、適切な接続語の用法の理解だった。

まず、文章全体構成の理解と段落相互の関係の理解を図るために、教材文全体をA3用紙一枚にまとめたもの（以下、「一覧シート」とする）を用意し、それを使って文章構成や段落相互の関係を学んだ。教科書は、様々な図やイラストがあり、文章の理解を深める上で有効であるが、文章の全体構成や段落相互の関係を考える学習では、ページを何枚もめくらなければならず不便がある。一覧シートを活用すると、常に文章全体が目に入るのので、文章の全体構成を理解しやすくなるだけでなく、段落相互の関係をとらえる際の有効な手立てとなった。

段落相互の理解を深めるために、各形式段落の小見出しを書かせ、ワークシートにまとめさせた。そして、一覧シートと小見出しを書きまとめたワークシートとを対比させ、文章の全体構成をとらえていった。文章の全体構成は図に書き表し、意味のまとまりとして文章が構成されていることを学んだ。その際、文と文、文章と文章をつなぐ接続語や文末表現の工夫について一覧シートにラインマーカーでチェックをしながら理解を深めていった。

## (4) 説明文を書くための資料を充実させたことで、文章表現への意欲を高めた子ども

教材文の読解を終えた子どもたちは、放送原稿の作成に取り組んだ。放送する番組のタイトルは、「何でもトリビア」。これは、自然や生き物、文化などの不思議を説明文にまとめ放送するものである。校内の図書室には、説明文を書く際の参考書や資料となる本に限りがあったため、子どもの書きたい分野や内容を保障するために、市の図書館へ行き、文章を書くための材料を集めることにした。事前に市の図書館へ行き、蔵書の数や種類について調べ、子どもが説明文を書くための資料集めを支援できるようにしておいた。また、自分で本を選ぶことができない子どもには、指導者の方でいくつかの参考資料を用意しておき、それらを活用できるようにしておいた。子どもたちは、自分が伝えたい内容の本を黙々と探し、本を開いては自分の文章表現に生かすことのできる情報が書かれているかを確認、資料を集めることができた。

## (5) 教材文の読解で身に付けた表現技術を自分の文章表現に取り入れ、説明文を書いていった子ども

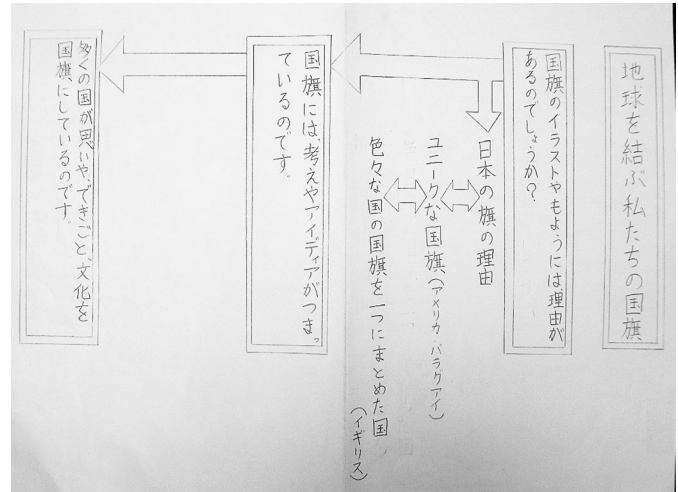
説明文（放送原稿）を書く活動では、論理的な文章を書くために、まず文章全体の構成図を書いた。（図2）構成図作りでは、段落相互の関係を矢印で書かせ、問題提起の段落とそれに対応した説明を述べる段落、そして全体をまとめる段落という文章構成ができるようにした。矢印で構成図を書くことで、段落相互が順接でつながっているのか、逆接の関係になっているのか、対比になっているのかが一目で分かり、段落相互の関係を確かむことができた。また、矢印を使って段落をつないだことで、段落相互の接続に適した接続語を選ぶことができた。

内容を分かりやすく伝える文章となったかを推敲するため、説明文を書く原稿用紙には、二つの工夫をした。一つは、内容に加除訂正を加えたり、接続語や文末表現の書き直しをしたりできるスペースを行間に設けたことである。書き直しや付け足しは赤ペンで行うこととした。こうすることで、推敲の後が一目で分かるようになり、学びの道筋

が明らかとなった。

もう一つは、自分の書いた文章に教材文読解で学んだ文章表現の工夫が生かされているかをチェックすることができる評価項目を設け、自己評価できるようにしたことである。子どもたちは、段落相互の関係はつながっているか、接続語を適切に使っているか、文末表現を工夫しているかなど、自分の文章を読み返し、よりよい文章へと推敲していった。次に、子どもの書いた放送原稿を紹介する。(図3)

(図2 A男の書いた文章構成図)



サボテンのとげのひみつ

みなさんは、サボテンを知っていますか？サボテンにはとげがあるのとなりがありません。サボテンは、とげがあつた方がサボテンらしいですよ。

サボテンは、よくスパーやお花屋さんに売っています。ある人は、サボテンつて、かわいいと言っている人もいますが、とげが指にささつたらいたいですよ。

サボテンは、いろいろな形をしておもしろくて、とげは固いです。それでは、なぜサボテンはとげがあるのでしょうか。

サボテンのとげには、動物から身を守つたり、くきをおおつて砂あらしから守つたり、太陽の光をさえぎつたりする役目があります。

水をたつぷりたくわえているサボテンは、動物にねらわれやすく、とげがなかったら食べられてしまうのです。中には、まっ赤なとげで、動物たちをおどしているサボテンもあります。

また、とげを白い毛やひげにかえて、くきをつつみ、はげしい気温の変化から体を守っているものもあります。

このように、サボテンにとって、とげは、すごく大事なのです。

私は、サボテンを育てていました。その時、なんでとげがあるのか分からなくて、とげを引っぱってみたりしました。でも、私みたいにみなさんは、サボテンのとげを引っぱらないようにしてくださいね。とげは、とても大切ですからね。

(図3 N子の書いた放送原稿)

N子の書いた放送原稿を、本研究で身に付けることをねらった文章表現力に照らし合わせて分析してみたい。

まず、論理的な構成に則り文章を書いているかであるが、この文章は、全八段落から構成されている。一段落から三段落にかけては、サボテンについて身近な生活の中から話題を提供し、サボテンのとげについて問題を投げかけている。これは、論理的な文章(「はじめ」・「なか」・「おわり」という形式に則って書かれている文章)における「はじめ」に相当する段落である。そして、「なぜサボテンにはとげがあるのでしょうか。」という問いかけに対して、次の四段落から六段落にかけて、サボテンがとげをもつ理由について具体的に説明している。論理的な文章における「なか」は、具体的な事象や事実を述べ、筆者の主張や結論を説得力あるものにする部分であることから、N子の書いた四段落から六段落にかけては、論理的な文章の「なか」に相当する。そして、七段落ではサボテンのとげの大切さを述べ、八段落で自分の意見をリスナーに訴える形で文章を締めくくっている。これは、論理的な文章における「おわり」に相当するといえる。

次に、段落相互の関係を正確に把握し、適切な接続語を使って文章と文章をつなぐことができているかであるが、五段落と六段落をつなぐ接続語に「また」を使っている。五段落では、動物から身を守る知恵を述べ、六段落には、激しい気温の変化から身を守る知恵を述べており、五段落と六段落はどちらも、サボテンが自分のからだを守る知恵について述べているので、N子は「また」という順接の接続語を使った。そして、六段落まで述べてきたサボテンがとげをもつ理由を受けて、七段落の接続語として、まとめを意味する「このように」を使っている。

最後に、文末表現の工夫で考えを伝えることについて、一段落から三段落の終わりにかけて、「～いますか？～ですよ。～でしょうか。」といったリスナーに投げかける文末表現を使っている。そして、四段落から七段落にかけて意味を強める断定表現で文末を統一し説得力を高めている。最後に八段落目では、「みなさんは、サボテンのとげを引っぱらないようにしてくださいね。とげは、とても大切ですからね。」と自分の主張をリスナーに投げかける文末表現で原稿を締めくくっている。



このように、N子は、説明文の読解で得た学びを、自分の文章表現に活かしてラジオ番組の放送原稿を書いたのである。

(6) 表現活動を多角的に評価したことで、自分の表現を客観的に見つめ課題を明らかにした子ども

完成した説明文（放送原稿）は、ICレコーダーで録音し、インターネットラジオ番組で放送することとした。ラジオ放送は、一度に不特定多数のリスナーを対象に情報を提供するというマスメディアの特性をもっており、情報提供は、提供する側の一方的な意図によってなされるもので、リスナーが聴きたいことを聴きたい時間に聴くことは困難である。一方、インターネットラジオは、web上でリスナーは聴きたいときに何回でも聴くことができるため、子どもの文章表現や音声表現の評価を自己評価だけでなく、相互評価や保護者からも評価をしてもらうことができるのである。子どもたちは、web上に流れるラジオ放送を聴きながら、自分の表現や仲間の表現を見つめ、互いに評価し合った。(図4) 評価の観点は、「トークの速さ」「声の大きさ」「明るさ」「丁寧さ」「文章の分かりやすさ」である。これまでは、書く活動に重点が置かれてきたが、放送では、音声による表現も重要になる。そこで、評価の観点には音声表現の評価を設けた。評価は◎○○△の3段階で評価するとともに、自由記述欄を設け、自分の考えを自由に書くことができるようにした。

さらに、保護者からも子どもの放送を評価してもらった。評価をはじめ、意見や感想の集約は、サイトマネジメントソフト(XOOPS)を活用して集約した。このソフトは、投票機能(図5)や掲示板機能を活用することができ、子どもの活動を評価する上で有効に機能した。掲示板からは、保護者の立場でとらえた子どもの成長や、子どもの表現力を育てていく上での今後の課題を知ることができた。次に、掲示板に寄せられた保護者の感想を紹介する。(図6)

MBC(Mirai Broadcast) 未来放送局

放送を見つめて

名前

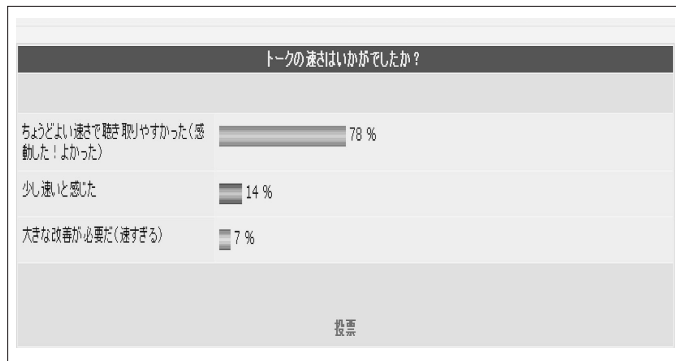
未来放送局の放送を振り返り、次の放送に役立てましょう。(◎ ○ △)

	名前	トークの速さ	声の大きさ	明るさ	丁寧さ	文章のわかりやすさ
オープニング	さん	○	◎	◎	○	◎
コーナー1	さん	○	◎	○	○	○
	さん	○	◎	○	○	○
コーナー2		○	◎	○	◎	◎
	くん	○	◎	○	◎	◎
エンディング	くん	△	◎	○	○	◎
	さん	○	◎	◎	○	◎

~コメント~

- \* くんの声がはやい。
- \* コーナー1のグループの声の大きさがよかったです。
- \* コーナー2のグループは、コーナー1とくらべて元気ななかった。
- \* くんが、とてもいいに読んでいた。
- \* 自分の声がゆくりすぎて聞きとりにくい。

(図4 インターネットラジオ放送を聴いての相互評価)



(図5 投票機能を活用した評価)

ラジオということで視覚でうったえられないので、すごく言葉を工夫していました。あることについて伝えるのに、どのような言葉を使えば聞いている人が想像をふくらますことができるかを、考えていました。そして話す内容の構成、展開を考えるようになったと思います。また、放送を聞いていると、聞いている人が聞き取りやすいように、はっきりと話しているように(発音しているように)感じられました。 “間”を工夫するといいいと思います。ラジオなので、無音のところがちよっと気になりました。

(図6 掲示板に寄せられた保護者からの意見)

5 成果

(1) 読解活動を子どもの表現に関連づけることで、説明文を読み解く活動の意味が変わる

説明文の読解活動の目的を、子どもの表現活動と関連づけたことで、子どもの読解活動に取り組む姿勢が変わった。

これまでは、説明文の読解では、主題を正確にとらえ、説明文を的確に読み解くための技術を身に付けるために行ってきたため、子どもの学びに対する姿勢は受動的であった。しかし、ラジオ放送という表現活動と本単元を関連づけたことで、子どもの学びに対する姿勢が、自分の表現をよりよくするために教材文のよさを取り入れるという、

能動的なものへと変容した。このように、子どもの興味・関心に基づき、読解活動と表現活動を関連づけて単元を構成することで、子どもは論理的な文章表現のよさを自分の表現に取り入れるだけでなく、教材文を能動的な姿勢で読み解くことができるのである。

## (2) 読解活動を子どもの表現に関連づけることで、子どもの言語活用能力が高まる

教材文を読み解く目的を「自分の表現をよりよくするため」とし、読解活動を進めたことで、子どもの放送原稿（文章表現）には次のような特徴が見られた。

- ① 「問題提起の段落」→「事実や事象について説明する段落」→「まとめの段落」といった、筋道のある論理的な文章を書いている。
- ② 問題提起の段落では、読者に話題を提示し、段落末には読者に問いかける内容の文を書いている。
- ③ 問題提起を受ける段落では、内容を詳しく説明するための段落構成（順接でつながる段落、逆接でつながる段落、対比でつながる段落）で文章を書いている。
- ④ 最後のまとめの段落では、事実や事象の説明を通して、自分が読者に伝えたいことを書いている。

このように、教材文を的確に読み解くという従来の目的意識から、教材文のよさを自分の表現に取り入れるという目的へと発展させることで、読解力が身に付くだけでなく、表現力をも高めることができる。

## 6 課題

説明文での読解を生かし、自分で説明文（インターネットラジオ番組での放送原稿）を書く際に、必要な資料を探すために市の図書館へ行った。ところが、資料となる本を選ぶことができない子どもが見られた。説明文を書くためには、自分の意見とそれを支え確かなものとする事実や事象が必要である。今回の資料探しの活動では、様々な本を閲覧しながら自分の書く説明文の全体構成を頭の中で思い浮かべなければならなかった。資料探しは、比較的読みやすい内容のもので、ページ数の少ない本が置いてある書架を指定して探すようにしたが、2時間という中で、説明文を書くに足る本を探し、頭の中で説明文としての全体構成を思い描くことは、この時期の発達段階では難しいことを感じた。じっくりと時間をかけ、資料を探しながら文章の構成図を書くことができるようにすることが大切である。

また、説明文は、読み手を意識して表現される「書き言葉」であり、ラジオ放送は聴き手を意識して表現される「話し言葉」である。したがって、表現を受け取る対象の受け取り方が違うわけであるから、それぞれにふさわしい表現によって考えを伝えるべきである。今回の研究は、説明文の文章表現のよさを書き言葉としての文章表現に生かすことを目的に取り組んだものである。書き言葉として表現した文章を放送原稿にしていくには、書き言葉から話し言葉への推敲が必要である。今後は、読み手にふさわしい表現と聴き手にふさわしい表現の違いや共通性について検討していく必要がある。

## 参考文献

- 1) 深谷幸恵 『論理的思考力を育てる授業の開発』, 明治図書, 2003年
- 2) 鶴田清司 『国語の基礎学力を育てる』, 明治図書, 2003年
- 3) 瀬川榮志 『確かで説得力のある説明文・解説文の指導』, 明治図書, 1998年
- 4) 市川芳則 『説明的文章の学習指導過程をつくる』, 明治図書, 2002年
- 5) 渋谷 孝 『説明文教材の新しい教え方』 明治図書, 1999年
- 6) 井上裕一 『説明的文章で何を教えるか』 明治図書, 1998年
- 7) 国立教育研究所 『作文技術指導大事典』 明治図書, 1996年
- 8) 文部科学省 『小学校学習指導要領解説 国語編』, 2003年, p7